

指導教員 吉松秀樹教授 印

3BEB1114 武井 健太郎

1. 問題意識「気配の捉え方の相違」

街には多くの“気配”があふれている。街を行きかう人々、ストリートファニチュア、騒音などが該当する (fig.1)。現代の都市で生活を送る気配に対して敏感である。だが、一方で自身の“気配”を都市の中に発信させて周囲に感じさせることは非常に困難である (fig.2)。都市の中にはもっと互いを意識し合うための空間が必要なのではないか。

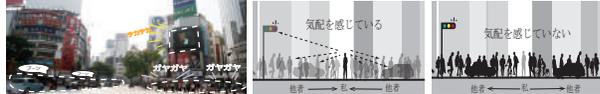


fig.1 街中で感じる様々な気配 fig.2 自己と他者との気配の捉え方

2. 分析「気配と透明性の関係」

自己と周囲の隔たりから気配を感じる時気配の強さは空間を隔てている透明度に関係する (fig.3)。



fig.3 ファサードによる気配の比較

空間を区切る操作は壁という障害を設け、隣接する空間へ意識を向けさせる。壁の透明性が高くなれば互いの意識も高くなる関係にある (fig.4)。

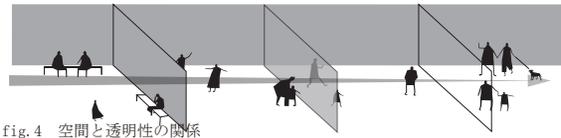


fig.4 空間と透明性の関係

気配に変化を持たせるためには壁自体に厚さ・重なり・濃度を付加されることで気配に変化を持たせることができるのではないかと考えた (fig.5)。



fig.5 気配の変化

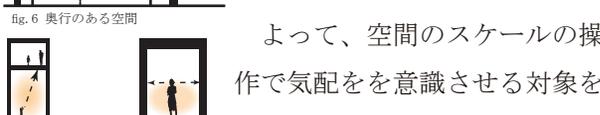


fig.6 奥行のある空間 fig.7 天井の高いと横幅の狭い空間

3. 設計操作「気配を操作する」

「気配と透明性との関係」で導き出した分析結果を用いて下記のように断面と平面の操作 (fig.8) で隣り合う空間さらには複数の空間に気配を発信させて、且つ受信も行える空間を作り出す。

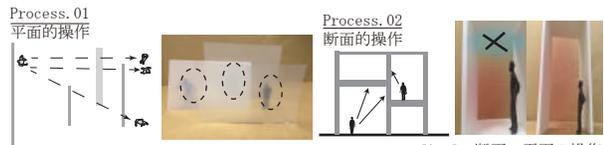


fig.8 断面・平面の操作

Process1では透過性を持つ壁の重なりによって互いの空間に人の存在をあいまいにし、Process2で利用する人の視線を空間のスケールを変えることで、気配を感じさせる。

4. 提案「都会の気配を発信する場」

平面的に壁を層のような配置にすることで奥の空間の認識を希薄させる役割を担わせて、壁の配置で空間を開かせる方向を操作することでパブリック機能とプライベート機能の空間に分けて場所によって気配を感じさせる環境を変化して、様々な気配を与えさせるカフェの機能を有した公共施設を提案する (fig.9,10)。

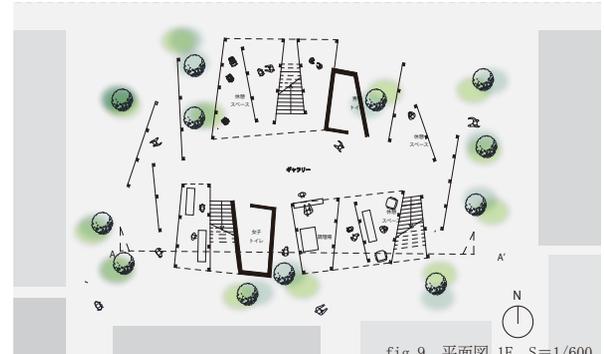


fig.9 平面図 1F S=1/600



fig.10 断面図 A-A' S=1/400